

## 【小笠原論文へのコメント】

## WISC-V と LD-SKAIP を用いた児童の評価と支援

## － 読みにつまずきのある児童に対する評価の視点の整理 －

奥村 智人

本論文で読みにつまずきがある児童を対象に、WISC-V と LD-SKAIP を用いた評価を行い、効果的な支援に向けた評価の視点や解釈について考察を行っている。本論文で取り上げている読みの問題には様々なものがある。読みのプロセスを大きく分けると文字・単語レベルの文字情報を音に変換する「デコーディング」と文・文章レベルの読んだ内容を意味として理解する「読解」がある（川崎, 2020）。発達性ディスレクシアは音読の速度と正確性の問題を主症状とし、デコーディングの弱さによる読み障害である（葛西, 2006）。デコーディングに問題はなく、文字を音に変換したり、単語をまとまりで読んだりすることはできるが、読んで内容を理解する読解がうまくできない読解の弱さを特徴とする読みのつまずきも存在する。読解の問題には、文・文章レベルの読みの処理に問題があると考えられ、研究が進められている。この文章の処理レベルでは、文の意味をつなぎ合わせて処理するだけではなく、文章内に示されていないことについて推論を使って理解する処理も行われる（Yuill, 1991）。読解をゴールとした読みのプロセスは、このような文字・単語、文・文章レベルでの処理が並行して進行する過程と考えられ、さらに、様々な並列処理を行うために、ワーキングメモリーの働きも重要である（Tanaka, 2014）。

小笠原論文で使用されたLD-SKAIP にはデコーディングと読解の領域を評価する検査が含まれており、WISC-IV、WISC-V、PVT-R、KABC-2ではデコーディングや読解の基礎となる

語彙、ワーキングメモリー、その他の認知機能を評価できる。本論文は、読みの問題について幅広く評価し、包括的に支援するための指針を探ろうとするものであり、現場での実践に向けた貴重な試みである。また、本論文では限局性学習症や発達性ディスレクシアといった診断名によって、限定された特性を論じることなく、複数の検査から児の特性を幅広く収集し、その結果から指導方針を検討していることも優れた特色の一つであろう。

論文でも考察されているとおり、指導効果が表れにくかった読解に関する効果的な評価や指導についての検討が今後の課題と言えよう。さらなる事例の蓄積と量的研究の組み合わせにより、様々な読みのつまずきに対する効果的な支援が実現することを期待する。

## 【文献】

- 葛西 和美, 関あゆみ, 小枝達也 (2006): 日本語 dyslexia 児の基本的読字障害特性に関する研究. 小児の精神と神経, 46: 39-44.
- 川崎聡大, 奥村智人, 中西誠ら (2020): 児童期の読解モデルの構築とその妥当性の検証. 日本教育工学会論文誌, 43 (Suppl.), 161-164
- Yuill, N., Oakhill, J. (1991): Children's problems in text comprehension. Cambridge University Press, England.
- Tanaka, T., Sugimoto, M., Tanida, Y. et al. (2014): The influences of working memory representation on long-range regression in text reading: an tracking study. Front Hum Neurosci, 8: 865.